

## 35 “保育園留学”！またここに、新たな形（意義と可能性）が見える?!

堂本 彰夫

### (1) 様々な要因（ニーズ）が結びつき合い、実現されている「ひとつづくりとまちづくりの循環」?!

過日、偶然ではあるが、興味沸くテレビ番組を観た。それは、「ようこそ！ちいさな留学生たち～世界遺産 石見銀山の保育園で～」というものであったが、「保育園」にも、とうとう「留学」制度？が登場しているということであった。もちろん、これを「留学」と呼んでいいののかは、多少の違和感はあるが、いわゆる「山村留学」といったようなことは、以前から言われ、実施されているので、それはそれでよしとしなければいけないであろう?!しかも、後でも触れるように、実は、その用語には、「特許」（登録商標）までついているのである。何という状況なのであろうか！

そこで、まずは、そのテレビ番組であるが、それは、第33回FNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品（制作：TSKさんいん中央テレビ）であった。ネットで、その番組のことを調べたら、「旅行でも、移住でもない。保育園留学」ということで、「待機児童に保育士不足。少子化対策や女性の社会進出のため無くてはならない保育園だが、現場は課題が山積している。その解決の糸口になるかもしれない取り組みが始まった。1～2週間、都市部の子どもたちが地方の保育園へ通い、保護者はリモートワークで仕事をこなしながら、家族で地方の暮らしを体験するという『保育園留学』だ。既存の一時預かり保育制度と宿泊をパッケージにしたプログラムとして提供される。都市部と地方の新たな交流の形だ。」とあった。

そして、この番組的には、「石見銀山のまちの地域ぐるみの子育てが、保育園留学で全国とつながる。まちの未来が変わる。」ということであったが、改めて、「島根県大田市大森町。世界遺産・石見銀山があり、町並みには江戸時代の面影が色濃く残る。昔から変わらない、ゆるやかな時間の流れるこのまちで、ある変化が今起きていた。全国的に少子高齢化が叫ばれるなか、震災やリモートワークの普及の影響もあって、この地域では子どもの数が増えているのだ。子育て家庭を支えるのが、まち唯一の保育園・大森さくら保育園。一時は園児が2人と存続の危機に直面したが、今では26人に増えた。こうしたなか、園を運営する社会福祉法人の理事・松場奈緒子さんが2023年に導入を決めたのが、全国で展開され始めた新たな取り組み『保育園留学』だ。」とされている。

さらに、「世界遺産のまち・大森町に、都会からちいさな留学生たちが次々とやってくる。聞くと、普段過ごしている保育園は高層ビルの一室で園庭がないという子も多かった。ここ大森さくら保育園は、園庭はもちろんのこと、いわば地域全体が保育の場で、あるがままの町並みも豊かな自然も子どもたちの遊び場だ。」「大森町では戦国時代から江戸時代にかけて、銀の採掘、運搬などのため人が行き交っていた名残りか、外からやってくる人々を受け入れる風土が根付いているという。『ずっと前から住んでいたような感覚』『おかえりと迎えてもらえた』と、保育園留学で訪れる家族たちは居心地の良さを口にした。石見銀山は時代を超えて、今度は子どもたちを受け入れる場所へと変わろうとしていた。」ともある。

最後には、「やってくるちいさな留学生たちは最初、緊張もするけれど、すぐに打ち解け、まるでずっと前からこの住人だったかのように馴染んでいく。そして大森町の子どもたちと都会地の子どもたちに今まで無かった交流が生まれ、無意識のうちにお互いが刺激となり成長していく。この出会いが、子どもたちやまちの未来をどのように変えていくのか。ちいさな留学生たちが秘めている、大きな可能性とは。」とあった。まさに、そこには、「ひとつづくりとまちづくりの循環」の新しい形が実現しているわけである?!

### (2) やはり、「思いのある人（達）」が創るのである?!

ところで、記事には、その番組を制作した、ディレクターの山下桃氏（TSKさんいん中央テレビ 地域創造ビジネス部）の言も載せられている。「“子どもは宝”。私自身2人の子を産み育てるなかで、親としてその意味を実感してきました。我が子に対する何ものにも代えがたい愛しさは、遙か昔から不変のものとして語られてきましたが、深刻な少子化が問題となる昨今、この言葉の持つ意味は広がりつつあるかもしれません。自身の子であるかどうかに関わらず、地域の、国の未来を担う貴重な人材としての”宝”であるためです。石見銀山のおひざ元・大森町は、人口400人ほどの小さなまちで、住民たちはお互いに名前呼び合います。自然体で相手を受け入れ、大切に空気感。それがちいさな留学生たちにも伝わっている様子が、取材を通して見えてきました。日本全

体で抱える保育の課題を一挙に解決することは難しくとも、島根県の山間のまちからヒントを示すことはできます。希望と可能性にあふれた保育園が、ここにはありました」とあった。すべて丸写しで申し訳ないが、「一時保育と宿泊を組み合わせ、都会地の家族が1週間から2週間地方で過ごす『保育園留学』。このプログラムで、東京から石見銀山のまち、大田市大森町にやってきた3歳の男の子は、ここで過ごすうちに『大の石見神楽好き』になりました。」とし、次のように紹介している。

「東京からやってきた弦くん、保育施設が提供する幼児の『一時保育』と宿泊をセットにして、家族で地方に滞在する『保育園留学』に参加、ここ大森町で2週間、過ごしています。そんな弦くん、大森町に来て『石見神楽』が大好きになりました。テンポの良いお囃子と舞で、神話の世界をよみがえらせる島根県西部の伝統芸能です。大森町に保育園留学するのはこれが2回目という弦くん。半年ほど前の留学で初めて見た神楽にすっかり魅了されました。神楽ごっこをする様子遊びながら、自然な流れで子どもたち、地域の伝統に触れています。さくら保育園の運営に携わり、保育園留学の『仕掛け人』でもある、松場奈緒子さん。このユニークな仕掛けに可能性を感じ始めています。」と。

話によると、彼女の思いと行動が、こうした取り組みを実現させたということなのである！「この地以外の子どもたちにも、この土地の魅力をフルに活用して保育を提供することで、未来が変わっていくんじゃないかっていうような、大げさにいうとそれくらいの、感覚も感じ始めました」と、彼女は述べている。

### (3) 注目される「キッチハイク」の存在！そこから見えてくるものは?!

ただし、ここまでの情報入手？であったら（感動はともかく？）、ここで、このように採り上げることもないのかもしれない？何故なら、その取り組みには、ある大きなシステムが関わっているのである！それは、「『保育園留学』は、株式会社キッチハイクの商標です。特許取得済。（特許第7164260号「滞在支援システム、滞在支援方法、およびプログラム」）」で、『地域の価値を拡充し、地球の未来へつなぐ』をミッションに掲げるキッチハイクは、地域と子育て家族をつなぎ、1-3週間家族で地域に滞在できる暮らし体験『保育園留学』を展開しています。子どもには心身ともにのびのび育つ環境を。家族には働きながら、子育てをしながらも多様な選択肢を。地域には、家族ぐるみの超長期的関係人口の創出や地域経済への貢献をもたらします。2021年より北海道厚沢部町から開始。都市部の子育て家族を中心に注目を集め、全国2500組待ち（2023年3月現在）となっています。」とするものである。

そして、そこには、「保育園留学は、『どうすれば子育ても仕事もあきらめず、どちらも全力でできるだろう？』という子育て家族の気持ちと、『人口減少が進む地域が持続可能であるためにはどうすればいいか？』という地域の声が出会って生まれた、地域と人生をつなぐ新しいまちづくり事業です。」とも。さらには、「『世界一素敵で過疎のまち』を掲げる北海道厚沢部町の認定こども園はげるから2021年11月にはじまりました。現在約1,200組以上のお申し込み、95%のリピート希望というありがたい反響をいただきながら、全国の自治体と公式連携を進めています。」ともある（ちなみに、現在、全国で47の園が、このシステムを導入しているようである！）。

そして最後に、「保育園は、地域ごとの多様性が映し出される場所です。山や海など自然に囲まれた園庭、地元の食文化を感じる食事、行き帰りに歩く伝統の街並みや田園風景…子育て家族にとって、すばらしい環境をもつ園がまだまだ全国各地にあります。こういった素晴らしい園に通い、のびのびと暮らすことがご家族にとっての『子育ての新しい選択肢』となるように。地域にとっても地域と家族の『長期的な関係を築く取り組み』となるように。保育園留学がやがて文化となるような世界を目指して、取り組んでいきます。子育て世代がより人生を謳歌でき、素晴らしい地域が、これからも持続していく未来へ。みなさまもどうぞ、この新しい取り組みを一緒に育ててもらえると幸いです。」と結ばれている。

このように、保育園の「滞在支援システム、滞在支援方法、およびプログラム」が「株式会社」を可能にし、特許の対象となっているのであるが（私にしてみれば驚きの何物でもないが！）、時代は、こうしたことを求めているのである！公共施設の「指定管理者制度」が進む中で、その運営組織の存続基盤の脆弱性を危惧している私であるが、これらのアイデアやしきみづくりの先駆性は、是非とも参考にしなければならないであろう?!何故なら、このような動きには、件のNPO法人のような、その存続そのものが難しい組織にあつては、まさに現実的な（否、したたかな？）戦略であり、時代の切実な要請に応えるものであるからである！

だが、やはり、ここには杞憂もある?!と言うのも、今は、その恩恵に浴することが出来るのは、一部の恵まれた子ども達（家族）だからである！しかし、一方で、それを受け入れる側にとっては、まちの活性化や存続につながる（先の、長野県泰阜村のように?）！そこが、複雑であると言えば複雑であるが、願わくは、あくまでもそれが、「ひとつづくりとまちづくりの循環」のための手段であり続けて欲しいということである！要は、それが、単なるビジネス（商品提供→収益指向）になって欲しくないということである！（つづく）